

山梨県韋崎市

西表堤防遺跡Ⅱ

民間開発にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

韋崎市教育委員会
韋崎市遺跡調査会

山梨県韮崎市

西表堤防遺跡Ⅱ

民間開発とともにう埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会

序 文

韮崎市は、甲府盆地の北西端に位置し、市内を塙川と釜無川の大きな河川が貫流しています。さらに南西端には御動使川があって、市域は三大河川の集まる古来水害の常習地域でありました。先人たちは、水と闘い、水と共存し、居住地・耕地を広げて、発展してきました。堤防は水と闘った治水遺構例、用水・堰などは共存を示す利水遺構例と言えます。市内には、先人のこしたこれら治水・利水遺跡が残っております。

韮崎市の市街地は、七里岩南端の崖下に形成されており、釜無川と塙川とに挟まれた地域となっております。特に釜無川に面した方には、市街地を水害からまもるために不連続に堤防がつくられてきました。戦国時代に武田信玄が甲府盆地の水害地域を守るために築いたといわれる信玄堤も、部分的には不連続に続くかすみ堤となっており、韮崎の市街地を守る堤防の様子と似ております。こういった堤防の技術はまさに先人の知恵から生まれ出されたもので、我々の社会・生活に多くの出来事の跡があるといつてよいでしょう。

この度発刊された本報告書は、韮崎の市街地を水災から防ぐために築かれた西表堤防遺跡の根本部分において調査された報告であります。調査面積は狭いものでしたが、埋没した堤体の一部が確認されました。詳細は本報告文によって頂きたいと思いますが、今回もたらされた資料が先人の生活ならびに社会を解明し、地域の歴史復元の一助となればと願うと同時に、文化財として永く後世に伝えることを責務と痛感致します。

最後に、西表堤防遺跡の調査並びに報告書作成に伴い、多大なる御理解と御協力を頂いた関係の皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成18年3月27日

韮崎市教育委員会教育長
韮崎市遺跡調査会事務局長

作 地 敏 久

例　　言

- 1 本書は、民間開発に伴い平成17年に発掘調査された西表堤防遺跡の報告である。
- 2 発掘調査は、株式会社韭崎土地の委託を受け韭崎市遺跡調査会が実施した。調査組織は別に示すとおりである。
- 3 発掘調査は平成17年5月13日から5月19日まで行った。
- 4 整理作業及び本報告書の作成は、韭崎市遺跡調査会が実施した。
- 5 凡例
縮尺は各挿図ごとに示した。
- 6 発掘調査及び整理作業並びに報告書作成にあたり、畠大介（帝京大学山梨文化財研究所）・小林健二（山梨県立考古博物館）・秋山圭子（积迦堂遺跡博物館）の各氏から御指導・御協力をいただきた。厚く御礼を申し上げる次第である。
- 7 発掘調査、整理によって作成された遺物及び資料は、韭崎市教育委員会において保管している。

発掘調査組織

- 1 調査主体　韭崎市遺跡調査会
- 2 調査担当　山下孝司（韭崎市教育委員会教育課生涯学習推進室）
- 3 事務局　韭崎市教育委員会教育課生涯学習推進室学術文化財係
教育長　作地敏久・奥石　薰（前任者）、課長　山本雄次、室長　水川秋人
係員　閔間俊明・桜木雅紀
- 4 調査参加者
萩原かつ美・高添　節・高添美代子

目 次

序 文

例 言

本文目次

I 調査に至る経緯と概要	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 遺跡の立地	
2 周辺の遺跡	
III 調査の結果	5
IV 遺構と遺物	5
1 遺構	
2 遺物	
V ま と め	14
写真図版	

插図目次

第1図 遺跡発掘調査地点位置図（1／200000）	2
第2図 遺跡地点周辺図（1／2500）	3
第3図 周辺の堤防等配置図	4
第4図 西表堤防遺跡①と周辺の遺跡（1／25000）	4
第5図 西表堤防遺跡平面図（1／40）	6
第6図 西表堤防遺跡立面図・断面図（1／40）	7
第7図 平成10年（1998）の試掘調査箇所と断面図	8
第8図 平成13年（2001）調査と今回調査箇所の堤防平面合成図（1/200）	9
第9図 堤体の石積みの構成	10
第10図 西表堤防遺跡出土遺物①（1／2）	11
第11図 西表堤防遺跡出土遺物②（1／2）	12
第12図 西表堤防遺跡出土遺物③（1／2）	13
第13図 「明治三十五年十一月笠無川通り堤防に付見分いたし候時の絵図面」	15
第14図 明治21年地形図	15
第15図 明治43年地形図	15
第16図 明治31年の蘿崎町水害状況写真	15
第17図 昭和28年頃の西表堤防と武田橋付近	15
第18図 昭和32年地形図（1/25000）	16
第19図 昭和34年の水害状況（『蘿崎市50年のあゆみ』より）	16
第20図 昭和37年航空写真（蘿崎市民俗資料館所蔵より）	16
第21図 昭和43年地形図（1/25000）	16
第22図 昭和51年地形図（1/25000）	16

写真図版目次

図版1 遺跡調査前近景、埋没土壠削後、発掘風景（北から）
図版2 発掘風景（南から）、石積み検出状況、埋没土堆積状況
図版3 游景風景、堤体石積み（南から）、堤体石積み（北から）
図版4 図示出土遺物、出土遺物

I 調査に至る経緯と概要

平成16年11月に株式会社塙崎土地より塙崎市水神一丁目地内の土地にかかり、埋蔵文化財有無の照会がなされた。宅地分譲開発予定地域は、治水遺跡である西表堤防遺跡とその周辺区域にあたり、会社側と協議の結果、堤防遺跡を除いた区域に関しては試掘調査を行ない、遺跡の存在を確認することとした。試掘調査は、平成17年3月16日に実施したが、遺跡の存在は認められなかった。周知の包蔵地である堤防遺跡については道路敷となる計画のため、本調査の必要を会社側に伝え、協議の結果工事着手前に現場の発掘調査を行なうこととした。さらに当該地域は、釜無川筋の河川区域に該当しており、発掘調査実施に際しては河川法第27条による土地の形状の変更許可申請を行なわなければならず、山梨県岐北地域新興局建設部と協議の結果、堤防堤体を損傷することなく調査を実施することで許可を受けた。

発掘調査は、平成17年5月13日より開始し5月19日まで行なった。調査は堤防を覆っていた土砂を重機で取り除き、人力によって堤体の石積みの間と表面に付着した上砂を清掃・発掘した。堤体をきれいに出した後、写真撮影や測量等の遺跡記録作業を行なった。調査終了後には埋め戻しを行ない、当初の形状に復した。引き続き整理作業を行い、報告書作成は平成17年度内に行なった。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

西表堤防遺跡は山梨県布崎市水神一丁目地内に所在する。標高は362m程。塙崎町時代の当該地域の小字は「一つ柳」で南に向かって「屋敷」「西表」とつく。釜無川左岸に不連続に並ぶ堤防のひとつで、市街地の北西側に位置し、堤防上は市道37号線となり、北側で県道とつながっている。県道はその先で二俣にわかれ七里岩台地上につづく青坂と国道20号につづく道(市道塙崎本町通線)に分岐している。西側には150m程離れて、小字「一つ谷前」の元大明神前堤防がほぼ併行している。県道を挟んだ北側には七里岩の急崖がそびえる。東側の県道はかつての国道であり、昭和43年(1968)に塙崎バイパスが開通し、国道は西側川寄り側に移設された。国道は堤防上と、堤防と堤防とを橋渡しするように建設されており、本堤防の東西に延びた川寄りの部分は国道となっている。

釜無川の両側には不連続に配置された堤防が並んでおり、左岸は一部国道20号線となっており、水神と一つ谷の境辺りから武田橋北側にかけては護岸の施設がつくれられ、今回調査された西表堤防はその北西側に併行する元大明神前堤防とともに現在の河川から取り残された状態となっている。

2 周辺の遺跡

今回の調査箇所の西側は、水路改修に伴い平成10年(1998)に試掘調査が行なわれ、東側と北側に関しては、都市計画道路事業塙崎本町通線(県道17号線)拡幅工事に伴って平成13年(2001)に発掘調査が行なわれた。

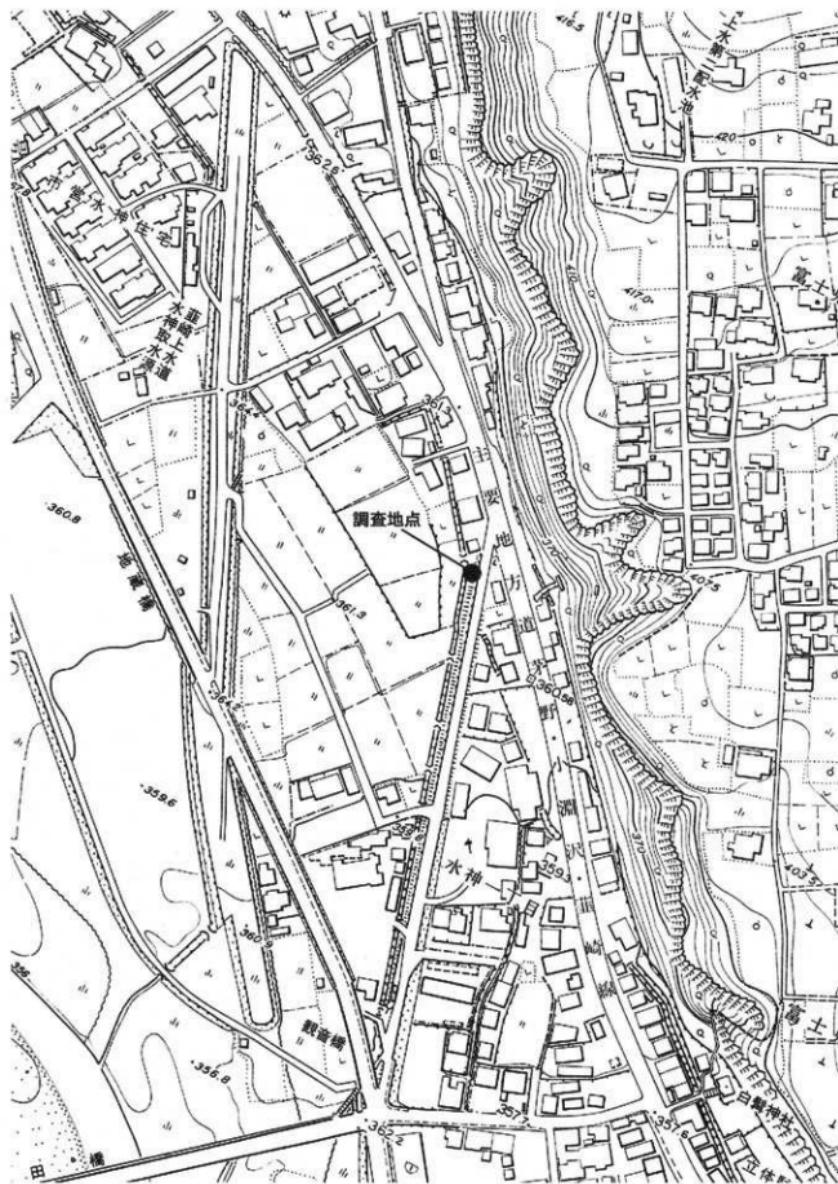
西表堤防遺跡①の周辺に分布する遺跡には、治水関連では平成15年(2003)に塙崎本町通り線整備事業に伴い調査された元大明神前堤防遺跡②のほか、③～⑤の堤防遺跡が点在する。また、塩川筋にも⑥～⑧の堤防遺跡がみられる。このほか绳文時代では山影遺跡⑨、新田遺跡⑩があり、新田遺跡は弥生時代・平安時代・中世の遺跡でもある。弥生時代の遺跡には下横屋遺跡⑪、古墳時代の遺跡では前期の坂井南遺跡⑫、中期の琵琶塚遺跡⑬、奈良・平安時代遺跡には北下条遺跡⑭などがあり、中世以降では居館跡の武田信義館跡⑮、白山城跡⑯、相模原跡⑰などがある。



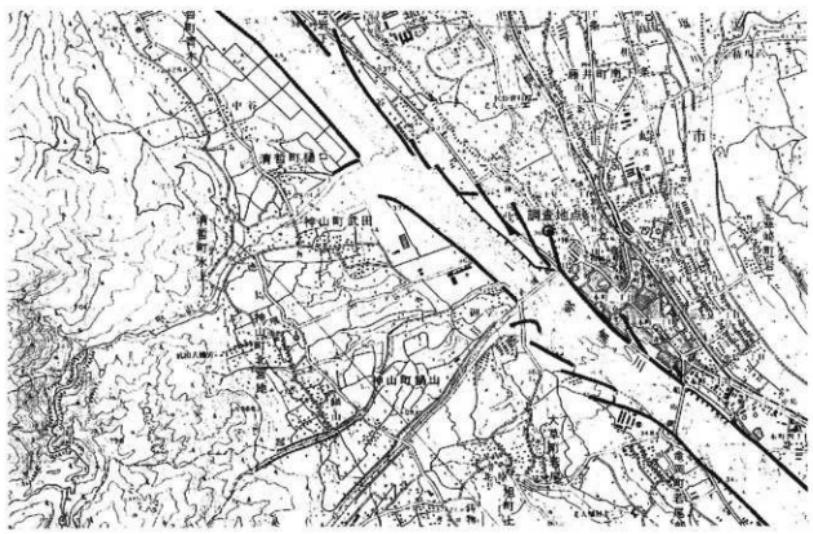
(国土地理院発行1:200,000地勢図「甲府」を使用)

0 (1/200,000) 10km

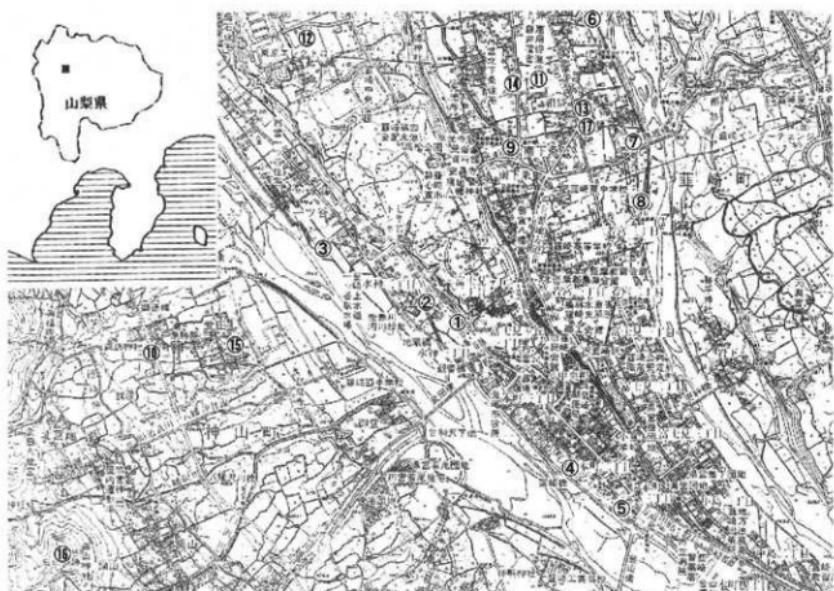
第1図 遺跡発掘調査地点位置図



第2図 調査地点周辺図 (1/2,500)



(国土地理院発行1:25,000地図図「盐崎」を使用)
第3図 周辺の堤防等配置図（『西表堤防遺跡』2002年より）



第4図 西表堤防遺跡①と周辺の遺跡（1:25,000）

III 調査の結果

調査は、道路敷にかかる約18m²を対象に実施した。畑などとなっていた土砂を除去したところ、深さ約1.2m、長さ約4.5mの石積みがあらわれた。西側川表側は水路の改修を受けており、石積みは途切れ、基底部は明瞭ではなかった。法の傾斜は約38度。

南端で堤防を覆っていた埋没土を観察すると、1層(細かい砂利・小石を含む暗褐色土)、1'層(細かい砂利・小石を含む暗褐色の耕作土)、2層(細かい砂利・小石・若干の炭化粒を混入する暗褐色土)、3層(細かい砂利・黄色っぽい砂を含む暗褐色土)、4層(砂利・礫・黄褐色砂・若干の橙褐色土・茶褐色土を混入する暗褐色土)、5層(小石・茶褐色土を若干含むキメ細かい砂質黄灰褐色土)、6層(小石を含む黄灰白色砂利層)、7層(灰色系シルト・鉄分を含む茶褐色土・小石を含むキメ細かい暗灰褐色土)、8層(暗灰褐色砂利土・若干の茶褐色土でやや黄色味がかる暗灰褐色土)、9層(石・コンクリートを含む灰色砂利)の層位で堆積がみられた。2・3・4層は水路改修工事による埋め土、9層のコンクリートは堤体石積みをくっつけていたものと思われる。

IV 遺構と遺物

1 遺構

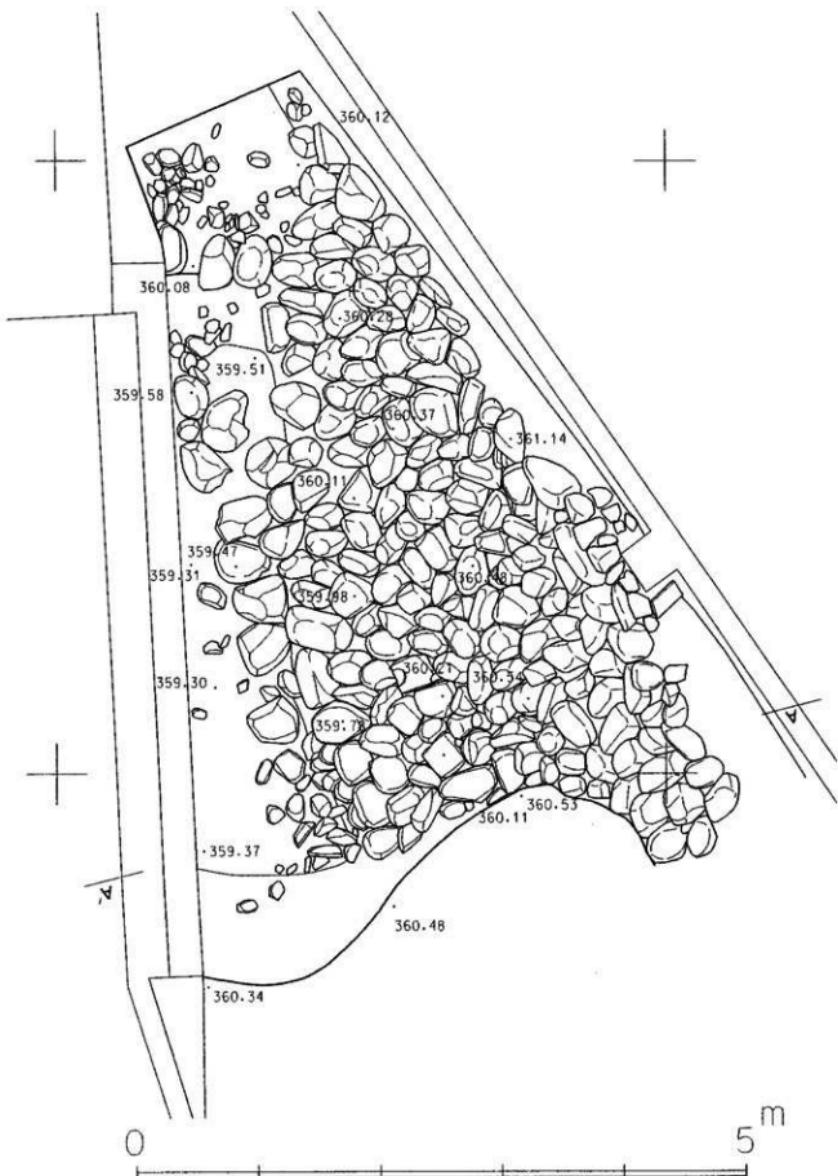
今回の調査は、堤体を壊さずに実施することとなっていたため、断ち割りを行なわず表面の記録・観察のみであったが、平成10年(1998)の工事途中の断面調査では、砂礫層の上に石(表込め)を盛っている状況が確認されている(第7図)。また、平成13年(2001)に行なわれた県道拡幅に伴う西表堤防遺跡の発掘調査では、堤体内部は川表側は表込め石層と堤体内石積み、川裏側は砂礫層によって盛り上げられて、外側に石が積まれ築造されていたことが判明している(『西表堤防遺跡』)。

表れた石積みは小口積みで、表面をはざって面を描えている。石の大きさは30cm~50cmで、平成13年の調査では、こちらの川表側に積まれた石は、川裏側よりも大きなものを使用しているという。堤防の両側は道路や水路改修にともない、搅乱を受けている。底から3分の1程は石が動いた様子であり、部分的に内側(堤体内部側)にコンクリートの付着が認められた。使用された石は、自然石であるが、間地石(四角に規格化された割石)が1点あった。

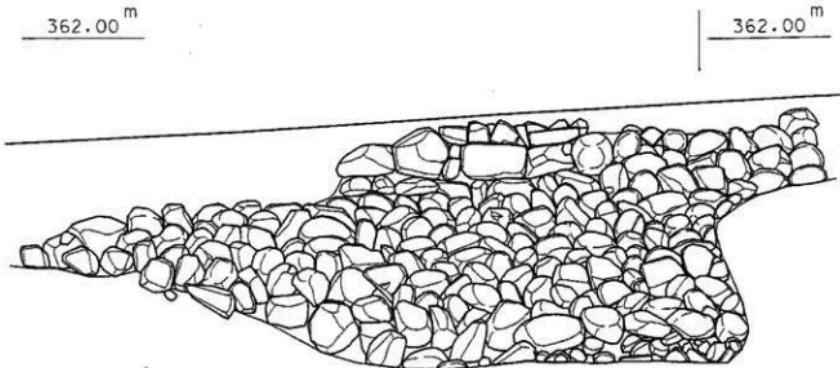
西表堤防の構築時期については、平成13年の調査において、堤体内にコンクリートが確認されておらず、明治31年(1898)9月の水害復旧によって、明治35年(1902)頃に築かれた可能性が高く、大正前期までを含めて想定されており、大正後期以降に調査部分は破壊していないと考えられている(『西表堤防遺跡』)。しかしながら、今回コンクリートの付着が堤体石積み裏側に認められたことによって、その構築時期が問題となってくる。

堤防にコンクリートが用いられるようになったのは何時頃からかというと、明治41年(1908)につくられた中田村の不動堤防は初めてセメントを使用したものであり(早川文太郎・須田守十『山梨縣水害史』1911年)、武川村の大石上堤防は大正4年(1915)に初めてコンクリートが使われたという(『武川村誌』下巻1986年)ことなどから、明治末から大正期頃で、昭和初期に普遍化したとみられている(畑大介「堤防について」『塙川下川原堤防遺跡』1998年)。

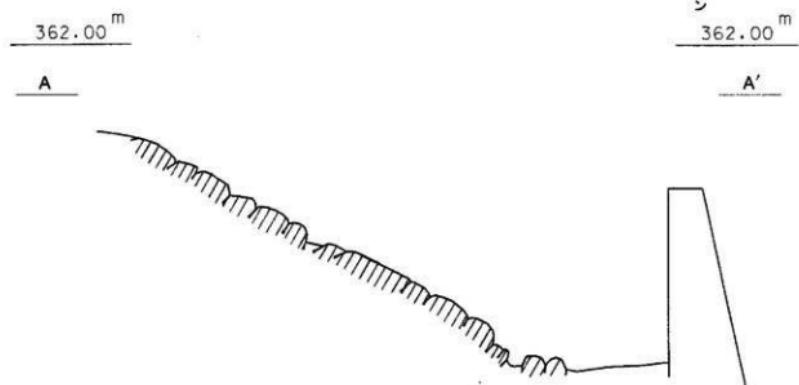
堤体がおおきく損壊しない場合でも、川表側の基底部が流されることや破壊されることがあり、コンクリートで補修したことも考えられよう。また、基底部近くにコンクリートが使用されていることから、堤体下半をつくるときに用いられ、上半部は積むだけという方法もあろう。いくつかのことが考えられるが、今回の調査では堤体の断ち割りを行なっておらず、明確な構築状況を確認出来ていない状況で時期の特定も困難であることから、ここでは、平成13年の調査結果報告に従っておきたい。



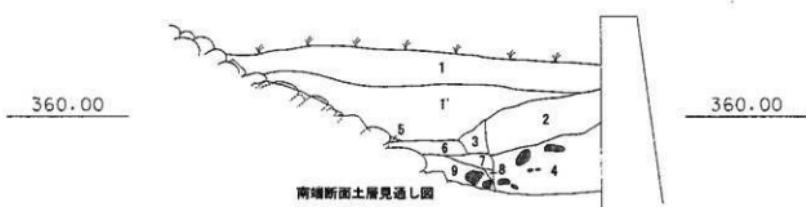
第5図 西表堤防遺跡平面図 (1/40)



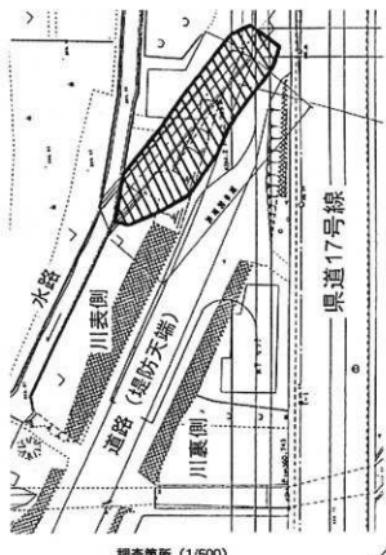
立面図



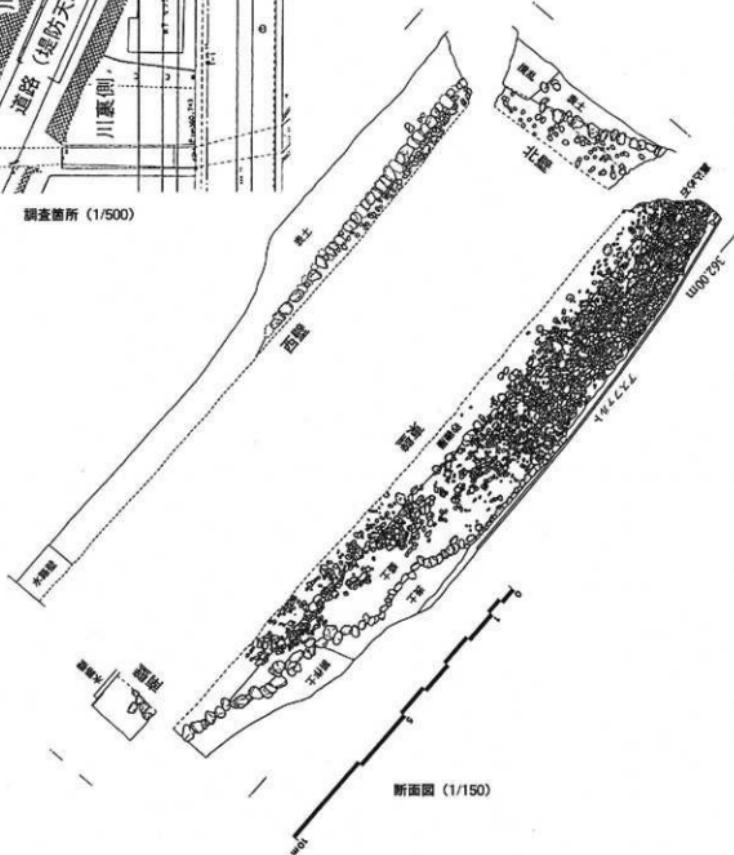
断面図



第6図 西表堤防遺跡立面図・断面図 (1/40)

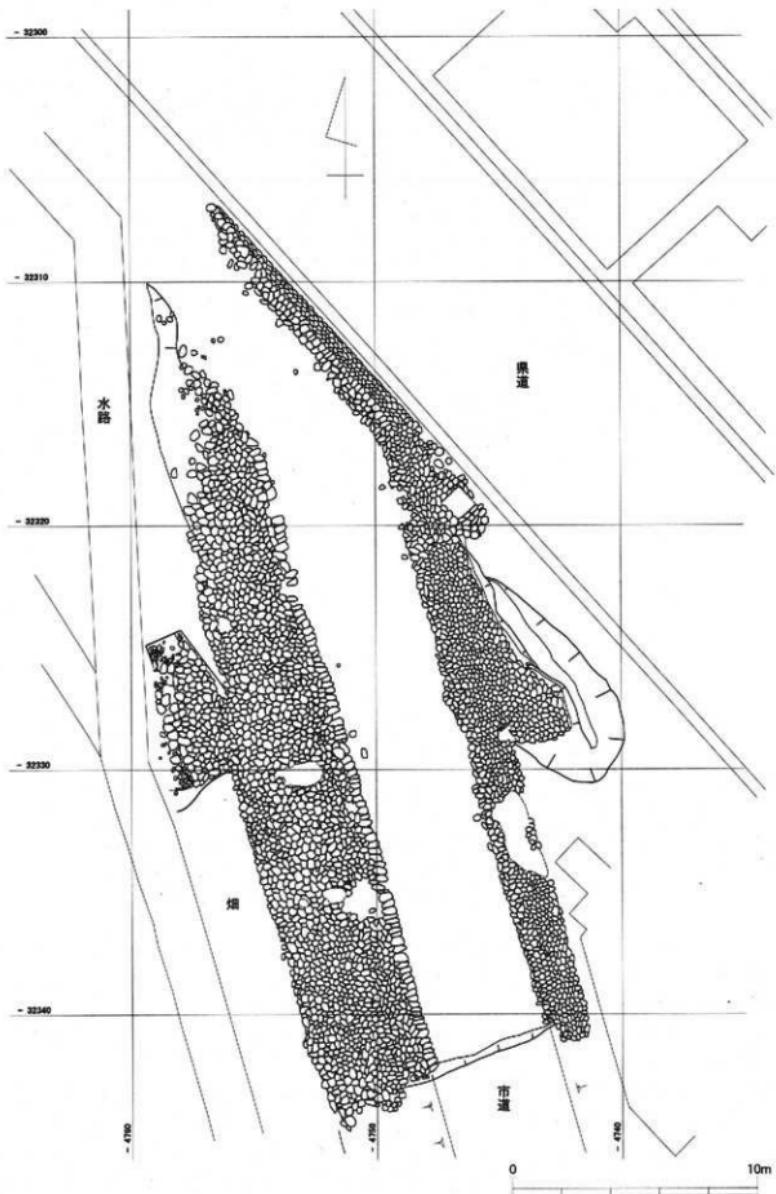


調査箇所 (1/500)

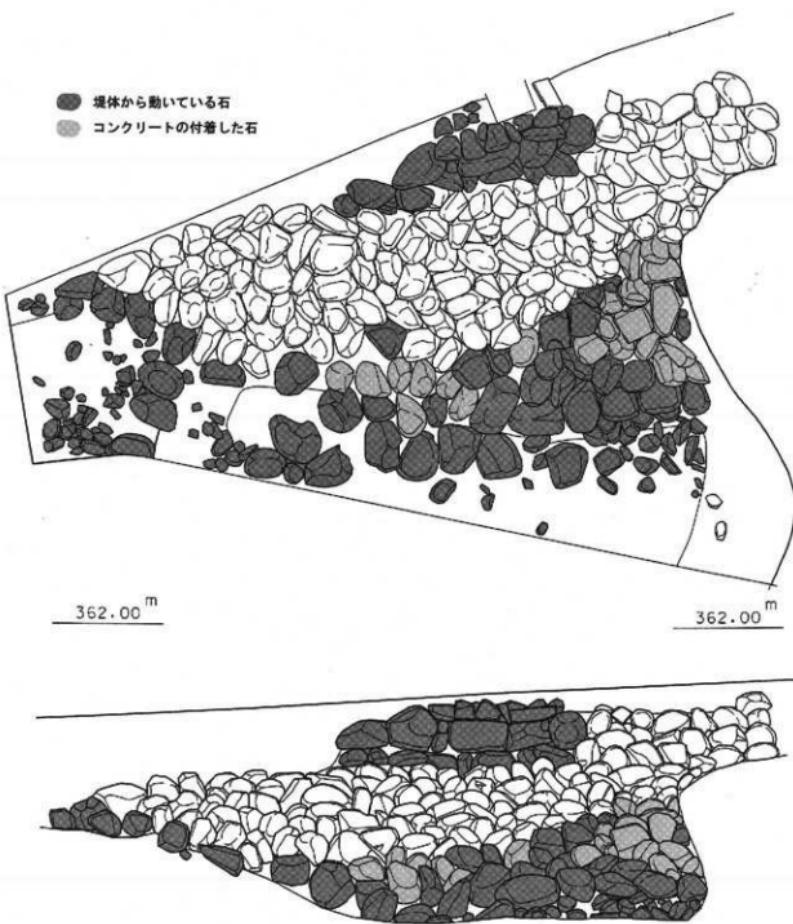


断面図 (1/150)

第7図 平成10年（1998）の試掘調査箇所と断面図（「県道17号線
改良工事に伴う埋蔵文化財の試掘終了報告」1999年より）



第8図 平成13年(2001)調査と今回調査箇所の堤防平面合成図 (1/200)



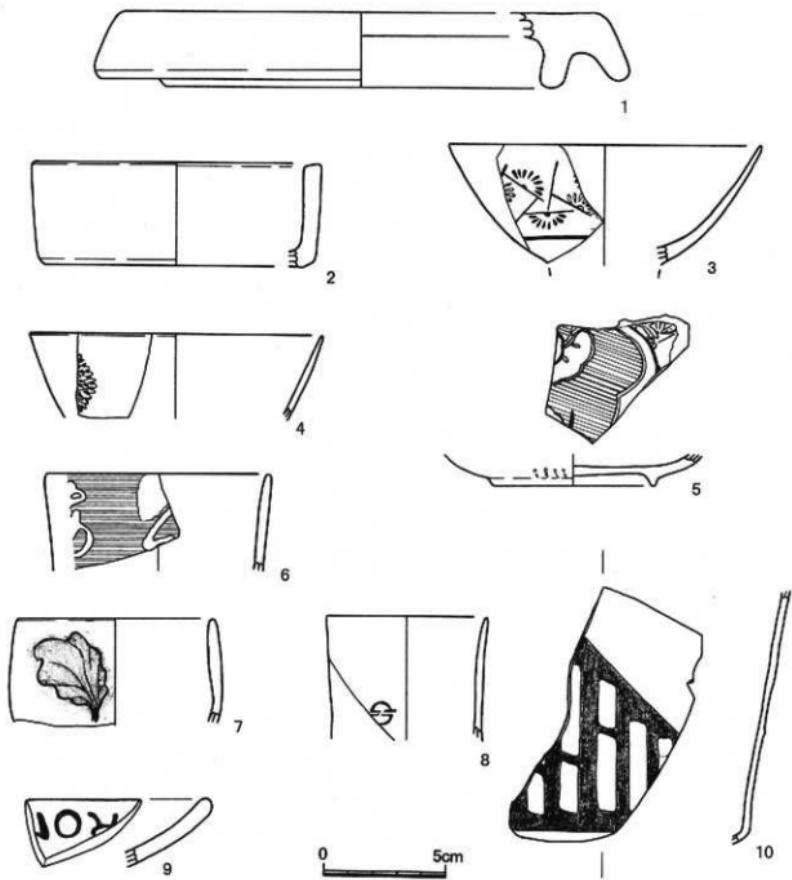
第9図 堤体の石積みの構成

2 遺物

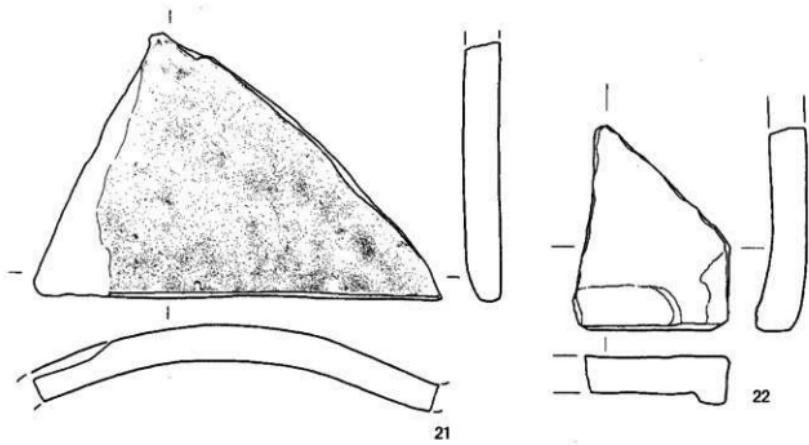
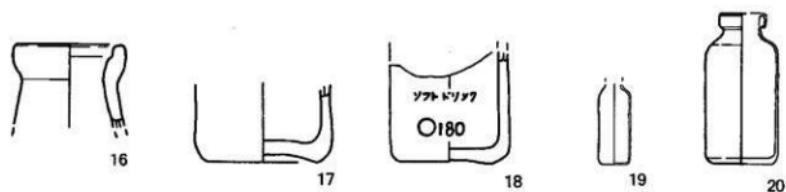
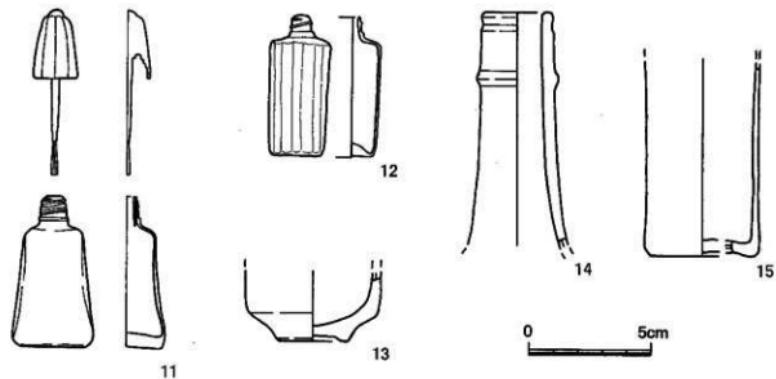
堤防を覆っていた埋没土から、瓦30点、陶磁器14点、瓦器1点、素焼きの土器4点、ガラス製品19点、タイル4点、土管1点、鉄製品22点がいずれも破片で出土した。それらは築堤後～廃堤以降に投棄されたものと思われる。主なものを図示して一般を伺い知る資料とした。

1は火消し壺の蓋の破片。直径は22cmと推定され、瓦質で表面は磨かれる。2は口径12cmほどの箱型の容器の破片。素焼きであり、窯道具の匣鉢みたいなものであろうか。3はゴム版によるものか青色の花弁文様などがつけられた飯碗の破片、4は色絵による花びらが描かれた碗破片、5は紺と緑の模様の施された皿破片、6は濃い青の横線と文字の書かれた湯飲み碗の破片、7も湯飲み碗の破片で茶色の葉が描かれる。8は蘿崎市のマークの書かれた湯飲み碗破片、9は内面にローマ字の書かれた皿で土産用の飾り皿である。

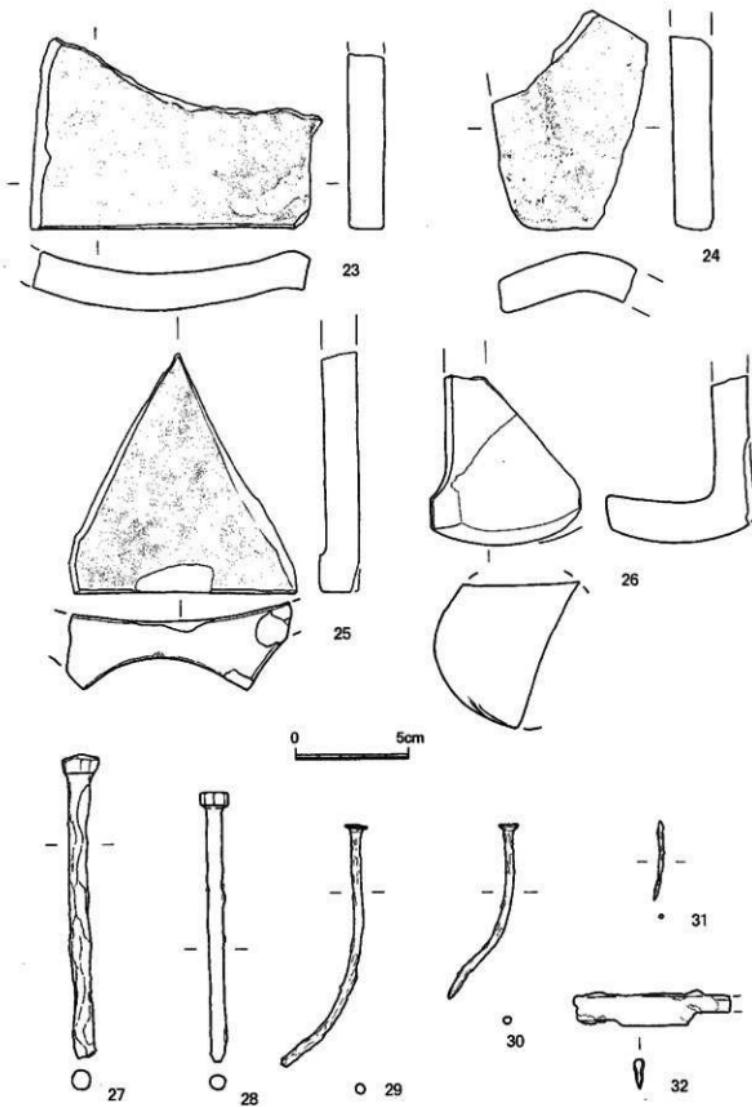
あろうか、10は濃紺の模様のある袋物の破片であろう。11はガラス製でマニキュアの小瓶、12はガラス製で化粧水の小瓶、13は乳白色のガラス製で化粧クリーム瓶の破片と思われる。14はガラス製で緑色の一升瓶の口部分、15はガラス製でサイダー類の飲み物の瓶の破片と思われる。16はガラス製牛乳瓶の口縁部で、比熱により歪んでいる。17はガラス製牛乳瓶の底部、18もガラス製牛乳瓶の底の部分「ソフトドリンク」と印字されている。19は薬液を入れたガラス容器のアンプル、20も薬液を入れたガラス製でゴム製の蓋の付く小瓶である。21～26は瓦片で黒褐色の棲瓦がほとんどであるが、22は赤褐色の煉瓦状の胎上で表面はブルー系の色で施釉されている。27・28は鉄製ボルト、29～31は鉄製の丸釘、32は剃刀の破片である。出土遺物の多くは近現代のもので、その大半は戦後の昭和時代のものと思われる。



第10図 西表堤防遺跡出土遺物① (1/2)



第11図 西表堤防遺跡出土遺物② (1/2)



第12図 西表堤防遺跡出土遺物③ (1/2)

V まとめ

釜無川に面した塙崎の市街地は常に洪水の被害に悩まされた地域で、雁行状に並ぶ堤防は水と人の闘いの歴史の証でもある。『塙崎町制六十年誌』には「明治三十五年十一月釜無川通り堤防に付見分いたし候時の絵図面也」の詞書のある図が採録されている。これは当時水神周辺に建設された堤防をあらわした絵図で、明治31年(1898)の水害によって決壊した堤防の修築にかかるものと考えられ、西表堤防の西北側にある元大明神前堤防は明治35年(1902)に建設されたとみられ、水神に並ぶ他の堤防の構築時期についても同時期であろうと推定されていた。しかし、塙崎本町通線と国道20号線が合流する手前の両道に挟まれた三角地帯に、背面に「塙崎直轄工事」と刻まれた「水神宮」の石碑があり、「明治卅二年七月一日着手卅三年七月二日竣工」とみえ、西表堤防遺跡・元大明神前堤防遺跡の調査における考察によって、『塙崎町制六十年誌』採録の絵図にみえる元水神二番・元水神三番・元高柳の各堤防は、明治33年(1900)の夏頃に完成したものとみられるようになった(畠大介「西表堤防の構造と築堤時期」「西表堤防遺跡」2002年、同「近代当該地域における水害と治水の歴史」「元大明神前堤防遺跡」2004年)。

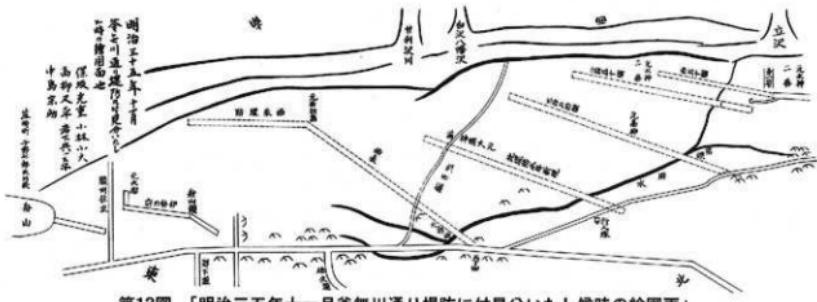
西表堤防遺跡の所在する地域が大規模な災害を蒙った明治31年(1898)の水害に関して、『塙崎町制六十年誌』に載る「町内高齢者座談会記録」の「大水害当時の思い出」のなかで、慶応3年(1867)生まれの柳本岩十郎氏(座談会当時83歳)は以下のように語っている。

塙崎は釜無、塙川の合流点に位置するので、毎年台風の季節になると災害を蒙るのが常でした。其の内で最も大きなものは明治三十一年九月五、六、七日の三日間にわたるもので。この時の水害は誰も予想していなかった。私は当時郡にいたのですが、当時の堤防は今と比べて簡単なものでした。この時は水二分土砂八分位の割合で出水しましたが、八ヶ岳の西沢が大崩壊したのが原因でした。堤防に土砂が押し寄せて、その上を水が乗り越すという状況でした。宿頭、水神以下の堤防が一瞬にして欠損したのが九月七日の晩のことでした。六口頃から警戒はしていたのですが、色々の対策も効を奏せずにやられ、殊に青坂下の西側が全部、下の船山頭が全滅し、流失家屋は三十二戸、行方不明四十余人の死体は殆ど発見されませんでした。救護を受けたものは五百七十余人に及び、小学校庭で炊き出しをしたのを覚えています。流失を免れた家も床上三尺も砂がたまり、又往還は家具木材がどんどん流れゆきました。出水時が真夜中の事だったので犠牲者も多かった訳で、屋上に助けを求めてつゝ流れゆくもの、水中の立木に取りつきやがて力尽きて流れゆくもの、或は浸水家屋の屋根に流れついて辛うじて生存する者等惨状を極めました。

大日本帝国陸地測量部の明治21年(1888)の地形図と明治43年(1910)の地形図とを比べてみると、調査された西表堤防遺跡は明治21年の図には無く、明治43年の図に描かれている。また、西表堤防の西北側の元大明神前堤防については、明治43年の図ではほぼ現状の位置に堤防があるが、明治21年の図にはそれが無く西側に「く」の字形の堤防が描かれている。元大明神前堤防は明治35年に新規に築かれたとみられるため、明治31年の水害によって「く」の字形堤防は破壊し、その後これにかわって元大明神前堤防が築かれたのであり、さらに西表堤防は七里巣の根本まで延長されたのである。

『西表堤防遺跡』報告書には「(大正5年地元生まれの方)物心がついたとき、この堤防はすでに存在していた。洪水等でこの(調査した)部分は破堤したことはない。」という聞き取りがあり、このことと前の柳本翁の話などからすると、西表堤防の調査部分は、明治31年の水害後の築堤以降大きな破堤はなく現在に至っているとみられる。

地形図などによってその後の堤防の変化を追ってみると、昭和4年(1929)の修正測図を経て昭和32年(1957)に発行された地理調査所の地形図「塙崎」でも西表堤防の形は変わっていない。昭和34年(1959)の7号台風では、西表堤防の下流側で決壊し市街地が洪水にみまわれた。武田橋東詰のあたりから下流側にかけて破堤し、釜無川の濁流は塙崎中学校(敷地は現在塙崎市役所となっている)から西町(現在の本町一丁目)



第13図 「明治三五年十一月釜無川通り堤防に付見分いたし候時の絵図面」
（『蘿崎町制六十年誌』より）



第14図 明治21年地形図



第15図 明治43年地形図



第16図 明治31年の蘿崎町水害状況写真
（『蘿崎町制六十年誌』より）



第17図 昭和28年の西表堤防と武田橋付近
（『蘿崎町制六十年誌』より）



第18図 昭和32年地形図(1/25000)



第19図 昭和34年の水害状況(『茲崎市50年のあゆみ』より)



第20図 昭和37年航空写真(茲崎市民俗資料館所蔵より)



第21図 昭和43年地形図(1/25000)



第22図 昭和51年地形図(1/25000)

を押し流した。上流に位置する祖母石地区も甚大な被害を蒙り、これを機に釜無川沿いの堤防が整備された。昭和37年(1962)の航空写真には、復旧された西表堤防と対岸の整備された新しい堤防と、それをつなぐ直直ぐにのびた武田橋が見える。昭和38年(1963)測量、昭和42年(1967)補測調査を経て昭和43年(1968)に国土地理院から発行された「茲崎」地形図には、武田橋から西側に延びる道路が描かれ、周辺の整備がより進んだことを示している。昭和43年には西表堤防を含めた釜無川左岸の堤防上に国道のバイパスが開通し、川寄りに護岸がつくられ、西表堤防の根本部分は本流からとりのこされた形となってしまい、昭和50年(1975)改測、昭和51年(1976)発行の国土地理院地形図「茲崎」には、西表堤防を含めて釜無川左岸の堤防上などに築かれた国道のバイパスが記載されており、昭和34年に流された西町の地区は、西表堤防の際まで町並が広がりをみせている。茲崎の市街地の発展には、先人たちの水害に対する復興の努力と、治水のためのたゆまぬ営為があったことを忘れてはなるまい。

参考文献

- 『茲崎町制六十年誌』茲崎町役場 1953年。菊島信清編著『釜無川の水害』サンニチ印刷 1981年。畠大介ほか『塙川下河原堤防遺跡』茲崎市ほか 1998年。畠大介ほか『西表堤防遺跡』茲崎市教育委員会ほか 2002年。畠大介ほか『元大明神前堤防遺跡』茲崎市ほか 2004年。

写 真 図 版

図版 1



遺跡調査前近景



埋没土掘削後

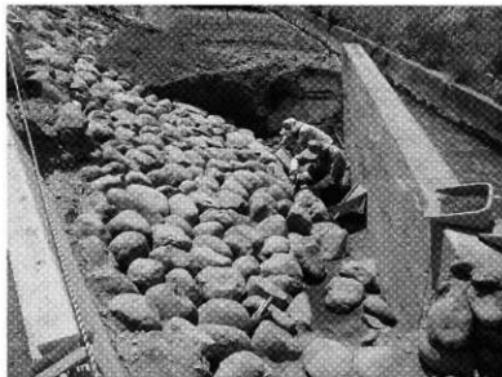


発掘風景（北から）

図版 2



発掘風景（南から）



石積み検出状況



埋没土堆積状況

図版 3



測量風景

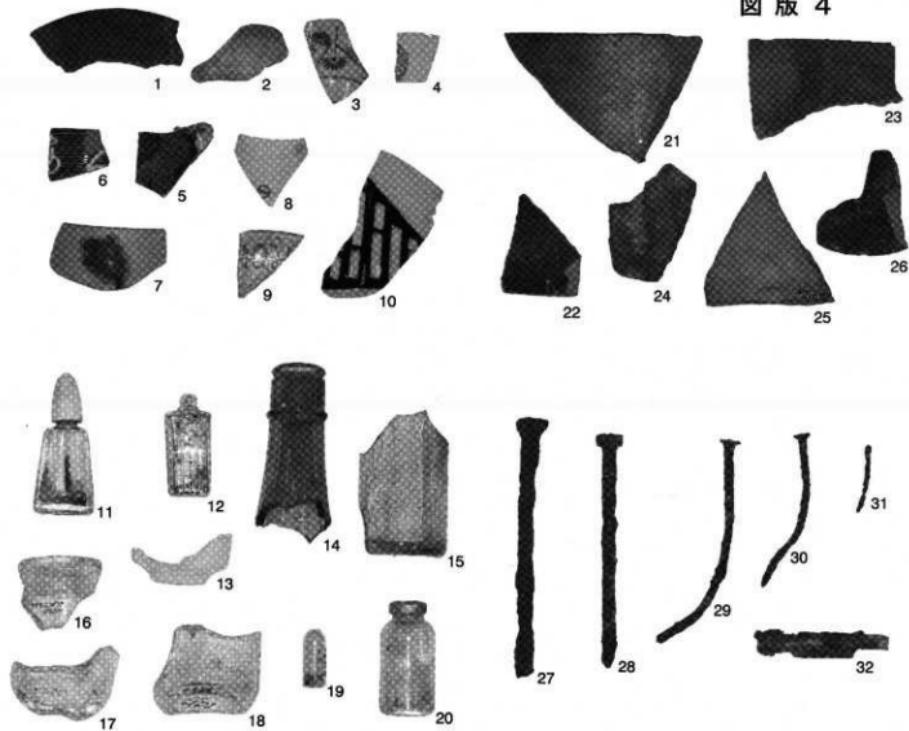


堤体石積み（南から）

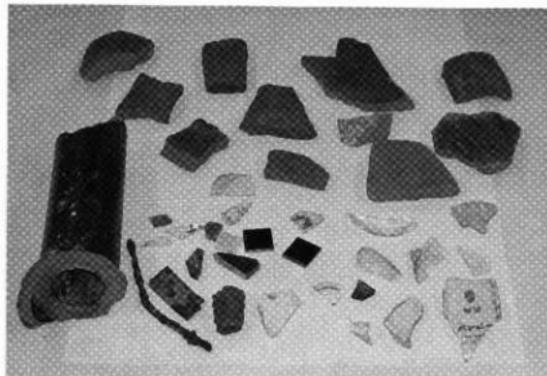


堤体石積み（北から）

図版 4



図示出土遺物



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にし おもて てい ぼう い せき に
書名	西表堤防遺跡Ⅱ
副書名	民間開発にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名・番号	一
編著者名	山下孝司
執筆者名	"
編集機関	圭崎市教育委員会・圭崎市遺跡調査会
発行機関	" "
発行年月日	平成18年3月27日
収録遺跡名	西表堤防遺跡(にしおもてていぼういせき)
遺跡番号コード	一
遺跡所在地	圭崎市水神一丁目地内 (北緯35° 42' 30"・東經138° 26' 51"辺り)
市町村コード	192074
調査期間	平成17年5月13日～5月19日
調査面積	約18m ²
調査原因	民間開発(宅地分譲地道路敷設)
主な時代	近代
主な遺構	堤防
主な遺物	陶磁器・瓦・鉄製品・ガラス製品
特記事項	一

西表堤防遺跡Ⅱ

民間開発にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成18年(2006)3月27日

編集・発行 圭崎市教育委員会・圭崎市遺跡調査会

〒407-8501
山梨県圭崎市水神1-3-1
TEL 0551-22-1111(内266)

印 刷 有限公司 タクト

